

連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部鹿毛敏夫教授の

「村上武吉～宗麟船の通行税を免除～」が掲載

●大分合同新聞朝刊 2016年6月25日(土)

同 新 聞 (朝刊)

2016年(平成28年)6月25日

十一

文 化

6

大友時代を

生きた人々

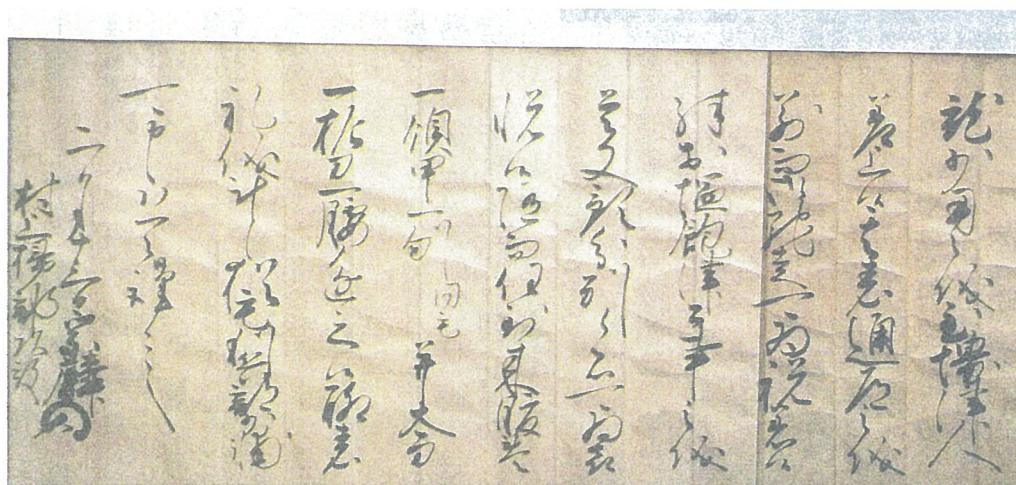


・来島（ともに愛媛県今治市）・因島（広島県尾道市）の3島に分かれて勢力を張つた戦国最強の水軍と評されます。宗麟の花押により、書状は永禄6（1563）年から天正3（1575）年の間のものと判明します。そこに記されているのは次の依頼文です。

「少用の儀につき、堺の津に至り人を差し上せ候。その表の通道の儀、別して御馳走祝着たるべく候。殊に、塩飽の津において公事の儀、これまた分別に預かり候はば、喜悦たるべく候。随つて、到来に任せ、腹巻一領・甲一列・ならびに太刀一振・刀一腰、これを進らせ候。いささかの礼儀を表すばかりに候」

所用のため堺に人を遣わすが、瀬戸内海の通行に際して便宜を図つてほしい。

宗麟船の通行税を免除



村上武吉に公事免除を依頼した大友宗麟書状（秋川家文書）

16世紀後半の興味深い古文書があります。戦国大名大友宗麟が瀬戸内海をテリトリーとした「海の戦国大名」村上武吉に宛てた切り封跡の残る書状です。

○ しま

特に、塩餽（香川県丸亀市）の港での公事（通行税）を免除願いたい。礼物として

能島村上氏と大友氏の同朋
関係を証する史料として、
主に政治史的立場から紹介
されてきました。

鹿毛敏夫

腹巻・甲・太刀・刀を進上
しようとの内容です。

たいのはこの書状によつて
塩飽の港での通行税を免除

い何の目的で瀬戸内海を西から東へと縦断したのでしようか。宗麟が派遣した使者は豊後から堺へと向かったのですが、これは単なる政治的使命を伴った大友家

使者の乗った船はこの書状の効力により、本来塙餉で支払うべき通行税を免除されます。免れた税の額は定かではありませんが、当該期の九州で1、2位の富強を誇る大名権力がわざわざ一筆したためてまで依頼していることから、相手の高額と推測されます。

特に大友氏はこの書状に添えて、腹巻・甲・太刀・刀の4品を礼物として村上氏に進上しています。これらのことから、この船で大友氏が堺へ運ぼうとしたのは、単なる「人」ではなく、4品の武具の進上見合う重要かつ免税額の高額な「物資」であつたと考えられるのです。

(名古屋学院大学国際文
化学部教授、大分市出身)
毎月1回掲載